

## [研究論文]

### 手風琴の曲集について—その記譜法を中心に—

渡邊 佐恵子

#### はじめに

現在までに、明治期の西洋音楽受容についての研究は、数多くなされている。当時は、洋琴（ピアノ）や風琴（オルガン）やヴァイオリンといった代表的な西洋楽器の他に、ハーモニカや、銀笛等を演奏することも、人々が西洋音楽の知識に触れる一端を担っていた。その中でも、現在はアコーディオンと呼ばれる「手風琴」は、主に明治20年代から30年代にかけて、非常に流行した（高田 1993 : 53）。当時はオルガンを「風琴」と呼んでいたことから、リードを用いるという点で同じ構造のアコーディオンは、このように呼ばれたのである。

本研究では、この手風琴の演奏のために数多く出版された曲集に着目する。これらの曲集は、明治20年代から40年代にかけて、関西圏や東京の出版社から出されたものである。これらの曲集の中には、西洋曲や清楽曲が掲載されているものもあったが、邦楽曲のみを掲載した曲集も数多くあった。しかし、邦楽曲が中心だったにも関わらず、多くの曲集は、西洋音楽の楽典の解説も掲載していた。

今回はまず、この手風琴曲集（以下、手風琴曲集と統一して呼ぶ）の重版状況と、この曲集が想定していたと考えられる対象について見ていく。そして、楽曲の記譜法について考察し、さらに、楽譜を読むためにこれらの曲集に掲載されている、手風琴の鍵と音の対応表<sup>1</sup>についても検討する。これらの曲集の内容は、人々が初めて西洋音楽の知識を学ぶ媒体のうちの一つであった可能性が大きいと考えられるため、本研究ではこれを仮定として論を進める。

従って、本研究では、手風琴曲集の記譜法、及びその記譜法を理解するために掲載されたと考えられる手風琴の鍵と音の対応表の考察から、当時の人々が、手風琴をどのような楽譜で演奏し、西洋音楽の音という、初めて学ぶ事柄をどのように理解したのか、について明らかにすることを目的とする。

#### 1. 手風琴に関する先行研究

明治期の手風琴の流通状況、楽器の構造、演奏法、演奏曲目を扱っている研究は、それほど多くはない。しかし、「明治期の関西における手風琴の流行」（高田 1993）では、明治期の関西における手風琴の普及状況を、手風琴教授所や風琴楽隊などの調査から、網羅的に、非常に詳細に述べている。また、本研究で取り上げる手風琴曲集についても、「手風琴教則本」として、その内容に触れている。

他に、「明治中期から大正期における洋楽器で日本伝統音楽を演奏する試みについて—楽譜による普及を考える—」（上野 2012）では、手風琴とヴァイオリンの楽譜集を例に挙げて、洋楽器で日本伝統音楽を演奏する経緯を、楽譜出版という観点から述べている。

また、中村洪介の未完の著書である『近代日本洋楽史序説』（中村 2003）では、一般音楽界における手風琴の流行について、簡潔に記されている（中村 2003：869-871.）。

## 2. 手風琴曲集について

### 2-1. 曲集の重版状況

本研究で用いる手風琴曲集に関しては、国立国会図書館所蔵の資料と、大阪音楽大学音楽博物館所蔵の資料、計46冊を一次資料として使用する<sup>2</sup>。

現在、現物を確認できる資料のうち、最も早くに出版されたのが、菊吉秋調の『風琴手引草』<sup>3</sup>である（高田 1993：70）。

本研究で対象とした曲集の中には、奥付から、かなり版を重ねているものもあることが確認できた。上野（2012）においても、大阪の三木楽器の社長である三木佐助が、手風琴の普及に先鞭をつけたのは自らが発行した『日本俗曲集：西洋楽譜』であると語った旨が述べられており、それを、この曲集が第6版まで順調に版を重ねたことから裏付けている（上野 2012：23-26.）。本研究では、この『日本俗曲集：西洋楽譜』の他に、重版が確認できたものを挙げる。

まず、同じ永井岩井（選曲）、小島賢八郎（調曲）の『日本歌曲集：西洋楽譜 一名・日本俗曲集続編』は、明治25年10月に出版され、明治27年1月には第2版が出ている。また、明治26年11月に出版された三田村楓陰の『手風琴速成独習自在』は、明治28年6月には第4版が出されたことが確認できた<sup>4</sup>。他に、明治30年3月に初版、同年10月に再版された、新井省五郎の『手風琴独まなび：下の巻』は、明治31年10月に訂正増補第3版、明治43年9月に第12版まで出ている<sup>5</sup>。さらに、初版が明治30年8月中野史郎の『新刊 手風琴俗曲獨案内—銀笛吹奏法付き』が、明治33年6月に第6版<sup>6</sup>、同じく初版が明治30年8月の市川道子の『手風琴独習 新曲三千題』が、明治34年5月に第12版<sup>7</sup>まで版を重ねている。そして、明治35年2月初版の山田武城の『手風琴独習 全』が明治36年6月に第5版<sup>8</sup>、明治29年10月初版の町田櫻園の『手風琴独案内』（東雲堂発行）が明治36年9月に第4版<sup>9</sup>、同じく、明治37年9月に初版の町田櫻園の『手風琴独案内』（林盛林堂発行）が、明治38年7月に訂正再版<sup>10</sup>、明治33年10月に初版の塚本卯八郎の『手風琴の栞』が、明治38年8月に再版、明治40年1月増補改訂第3版<sup>11</sup>と、それぞれ版を重ねていったことが確認できた。

重版が盛んに行われていた手風琴曲集を複数確認できたことから、当時の人々が、これらの曲集を手にした可能性が高いことが仮定できる。

## 2-2. 曲集の対象

本節では、これらの曲集が主にどのような人を対象にしていたかということについて述べる。

まず、これらの曲集名に着目する。2-1. で重版の例として挙げた曲集だけでも、三田村楓陰の『手風琴速成独習自在』、新井省五郎の『手風琴独まなび：下の巻』、中野史郎の『新刊 手風琴俗曲獨案内—銀笛吹奏法付き』、市川道子の『手風琴独習 新曲三千題』、山田武城の『手風琴独習 全』、町田櫻園の『手風琴獨案内』等、「独」という語が曲集名に入っているものが非常に多い。これは、楽器を教習する際、教師に就かなくても、独学でできるようになることを目的としているためである（高田 1993 : 70）。このことは、今回調査した曲集計46冊の中で、「独」が曲集名にあるものを31冊確認できたことから裏付けられる。

さらに、対象者を探る手がかりとして、その曲集の著者が、手風琴曲集を執筆した経緯、楽譜の作成の仕方等を述べている「自叙」や「緒言」、「凡例」、「例言」がある。その中に、当時の人々にとって、手風琴はどのような楽器として認識されていたかを示すものがある。例えば、四竈訥治は、『手風琴独習之友第一集』の中で、「手風琴は價も至て廉に練習も亦容易なれば獨樂の友には至極結好のものなるへし」（四竈 1890 : 2, 3）とし、手風琴は独習し易い楽器だと述べている<sup>12</sup>。また他にも「何につけ彼につけ高尚で意氣で夫で最もお手軽くて独習し易い楽器と云へば洋の東西を引くるめて手風琴に如くものは無い」（葭田 1908 : unpagged）という曲集があることから、これらの手風琴曲集が編纂された背景には、手風琴は独習し易い楽器という当時の認識があったことが推測できる。

また、他にも、この曲集を出版する上で想定したであろう対象者についても触れている曲集がある。例を挙げると、「手風琴の譜ハ特に初學者に便利の爲め鍵番譜を以て記載せし故是により奏樂するときハ識らず／＼愉快の間に其奥妙を極むるに至るべし」（池田；加川 1893 : 3）、「本編ハ博ク古今ノ歌曲ヲ對照編纂シテ初學者了解ヲ肯トシ専ラ平易ヲ取り〜（以下省略）」（新井；柏原 1893 : 1）、「本書ハ從來世ニ出デシ書ト異ナリ敢テ歌曲ノ多キヲ望マズ故ニ或ル一部分ノミニ流行セル歌曲ノ如キハコレヲ編入セズ コレ初學ノ人ニモ速成ヲ期センガ爲ナリ」（吉岡 1898 : 2）と、「初學者」にとって分かりやすく編纂した旨が記されている曲集がある。他にも、「初學者の者手風琴を學ぶに初めよりして歌曲を奏せんことを欲し音階を練習するを好まず 是れ大なる誤なり」（三田村 1893 : 1）というように、手風琴を学ぶ「初學者」の練習時の問題点を挙げているものや、「著者ハ多年コレガ實驗ニヨリコレニ完全ナル譜ヲ作りタレバ之ヲ公ニシ以テ全好者ニ樂ヲ共ニセントスル所以ナリ 世ノ全好者幸ニ實驗シテ幾分ノ愉快ヲ感ゼラレナバ幸甚」（吉岡 1898 : 1）というように、「全（同）好者」という語も出てくる。このことから、この手風琴を独習する主な対象者は、「初学」の者で、特に手風琴の演奏を専門と

する者ではなく、「全(同)好者」たちであったことが分かる<sup>13</sup>。

この「初学」という語が、西洋音楽の知識を初めて学ぶ者に対してなのか、手風琴の演奏の未習者に対してなのかは、場合によって異なるが、上に挙げた引用と、この当時の西洋音楽の受容状況から考慮すると、人々は、手風琴を初めて演奏すると同時に、西洋音楽の知識も学ぼうとしていたと考えられる。

本研究では、手風琴や西洋音楽の知識の「初学者」の人々に対して、これらの手風琴曲集は、彼らが楽譜を読めるようにどのような知識を提供したのか、その記譜法と、その楽譜を読むために記された内容と考えられる、手風琴の鍵と音の対応表に焦点を当てる。

## 2-3. 曲集の内容

### 2-3-1. 手風琴の使用法についての説明

明治期に日本国内で流通していた手風琴は、主にドイツやイギリスから輸入されたものであり、その手風琴は、ボタン式のダイアトニック・アコーディオンであった(高田 1993: 54-61.)。ダイアトニック・アコーディオンとは、「蛇腹の開閉で1つのボタンにつき2つの音が出た」(高田 1993: 56) アコーディオンのことである。

この手風琴は、2-2. でも挙げたように、「どくしゅう やす がっき 獨習し易い楽器」(葭田 1908: unpagged) であったため、楽器の流行とともに、数多くの曲集も出版されたわけであるが、その手風琴曲集の冒頭には、手風琴の図、そしてその使用法についての解説が掲載されていることが多い。以下、塚本卯八郎の『手風琴の楽』より、その使用法についての説明を「扱方」の部分より引用する。

「手風琴ヲ奏スルニハ先ツ圖ノ右トアル方ヲ右ノ膝ニ置キ右手ノ親指ヲ揖指ニ貫キ四指ヲ自由ニ働カシメ左手ヲ懸帶ニ指込ミ親指ハ裏面ノ鍵ニ近付ケ後チ左手ヲ以テ任意ニ伸縮スベシ

音ヲ發センニハ右ノ四指ヲ以テ十ノ鍵ヲ何レナリトモ指先ニ壓ヘツヽ伸縮スベシ又左手ノ方甲乙ノ鍵ヲ壓ヘツヽ伸縮スル時ハ低音(ベース)ヲ發スベシ然レ共之ハ充分練習ノ上ナラザレバ成得難カルベシ

又裏面ノ鍵ヲ右ノ親指ニテ壓ヘツヽ伸縮スル時ハ至急ニ風ヲ出入スル事トナレバ縮ミキリ又ハ伸シキリタルトキ風ヲ出入スベシサスレバ音ノ連続スルヲ得ベキナリ」(塚本 1907: 2)

【図1】は、この引用と同じページに掲載されている「手風琴之圖」である。このように、手風琴の右方に10個の鍵(以下、引用に則り、ボタンではなく鍵と呼ぶ)があり、前述のように、当時の手風琴はダイアトニック・アコーディオンであったため、蛇腹を押し引きすることで各鍵から2種の音が出た。よって、旋律には20音を用いて演奏した。またこの他に、左に「甲乙ノ鍵」があり、I度とV度の和音が出た<sup>14</sup>。和音が二種類しかなかつ

たことは不便だが、旋律と和音を同時に演奏できる手風琴は、当時の人々にとって、非常に魅力的な楽器であったと考えられる。



【図1】「手風琴之圖」(塚本 1907 : 2より転載)

### 2-3-2. 手風琴の鍵と音の対応表

手風琴曲集でほぼ必ず掲載されているのが、本研究でも取り上げる、手風琴の鍵と音の対応表である。【図2】は、新井清次郎、柏原由二の『手風琴独奏自在』における対応表である。2-3-1. で述べたように、当時の手風琴はダイアトニック・アコーディオンであったため、例えば、三の鍵を押さえて蛇腹を押すと $c^1$ 、同じく三の鍵を押さえて蛇腹を引くと $d^1$ が出たわけだが<sup>15</sup>、これは、【図2】からも分かるように、必ずしも音階の順番通りに配置されていなかった。また、六の鍵から押し引きが反対になることもあり、鍵を押さえて楽器を演奏する行為と、西洋音楽の音を理解する思考は、初学者にとっては、なかなか結びつくものではなかったと考えられる。そこで、これらの曲集には、この対応表が掲載されていたと考えられる。

手風琴曲集の楽曲の記譜法については3. で詳述するが、この対応表にある項目を見ることで、その曲集の著書が、この曲集を手にする人々に、西洋音楽の知識をどの程度理解することを求めていたかという意図が分かると思う。

【図2】の曲集においては、対応表は「手風琴律名解圖」と称されている。まず一番上に、蛇腹の押し引きの記号が書いてあり、この曲集の場合には、○：押す、▲：引くという記号である。その下に、10の鍵番号があり、さらにその下に、奏法譜における記号が、「手風琴音符」としてある。そしてそれと対応して、数字音符、五線譜による音符が書かれている。

曲集によって、この手風琴の鍵と音の対応表に書かれている項目は異なる。この曲集の

ように五線譜が書かれている場合もあるが、書かれていないことも多い。さらに、清楽曲が掲載されている曲集には、その楽曲に工尺譜が併記されている場合も多いことから、工尺譜での漢字表記が対応して掲載されていることもある<sup>16</sup>。

その中で今回注目したいのは、数字音符の存在である。このことについては3-5. で詳述するが、数字音符は、ほぼ全ての曲集の手風琴の鍵と音の対応表に掲載されている。その場合には、算用数字が多いが、漢数字の場合もあり、中には、その読み方である「ヒフミヨイムナ」も併せて掲載されているものもある。本研究では、この対応表に書かれている項目の中から、手風琴の音を理解するのに大きな役割を担ったと考えられる数字音符に焦点を当てる。



【図2】「手風琴律名解圖」（新井；柏原 1893：3より転載）

### 2-3-3. 楽典の解説

ほとんどの手風琴曲集に、西洋音楽の楽典の解説が掲載されている。この説明は、基本的にはその後に掲載されている楽曲の楽譜を読めるようになるためのものである。例えば、2-3-2. で挙げた新井清次郎、柏原由二の『手風琴独奏自在』を例に挙げると、音符、譜表、小節、加線、音部記号、音価、フラットやシャープ、ナチュラル、拍子、付点、タイ、3連符、強弱記号、フェルマータ、反復記号とセーニョ記号について解説している。音部記号では、ハ音記号についても言及していて、この曲集の楽曲を演奏するのに、特に必要のない知識まで掲載されていることもある（新井；柏原 1893：4-8.）。また、三味線と手風琴を合奏する場合の調子の合わせ方について言及している曲集もある。

### 2-3-4. 曲目

手風琴曲集の曲目は、邦楽曲が圧倒的に多い。例えば、2-3-2. 及び 2-3-3. で挙げた、新井清次郎、柏原由二の『手風琴独奏自在』では、この曲集の目次の分類に従うと、《君が代》、《天長節》等の「唱歌」が8曲、《數へ唄》、《甚句節》、《宮さん》等の「俗曲」が52曲、「米國」等の「各国歌」が11曲、そして《九連環》や《茉莉花》

等の「清樂」が10曲となっている。高田(1993)は、手風琴曲集の収録曲の内訳を調査し、「洋楽10%、明清楽8%、俗曲、箏曲などの邦楽57%、唱歌12%、軍歌13%」(高田1993:71)と結果を報告していることから、邦楽曲が非常に多かったことが分かる<sup>17</sup>。

本研究では、手風琴曲集が、西洋音楽の知識をいかに掲載したかに焦点を当てるため、演奏された曲の種類に関しては特に考慮しないこととする。

### 3. 手風琴曲集における楽曲の記譜法について

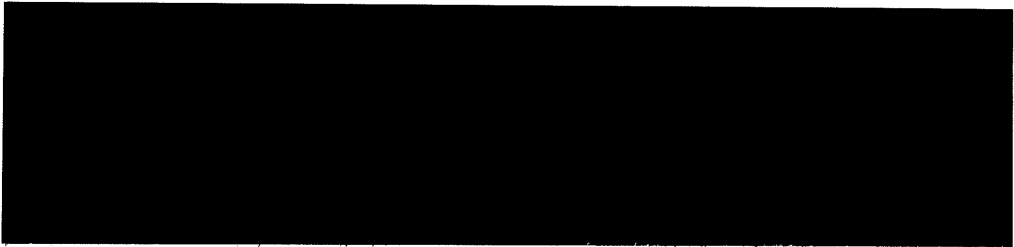
手風琴曲集では、主に五線譜、数字譜、奏法譜(手風琴譜)の3種の記譜法が併用されたり、単独で用いられたりしている。ここでは、奏法譜と数字譜について触れる。この2種の記譜法は、数字を用いた記譜法という点では同じだが、奏法譜は各楽器の奏法を示す記譜法、数字譜は音の高さを示す記譜法という、大きな違いがある。

#### 3-1. 奏法譜(手風琴譜)

奏法譜とは、現在通常用いられる譜表記譜法の代わりに、その楽器の奏法を記号で表す記譜法であり、主に器楽用の記譜法として用いられる。この時期に流通していた手風琴は、2-3-1. 及び 2-3-2. で述べたように、通常10の鍵があり、その各鍵から2種の音が出た。それを、一の鍵を押さえながら蛇腹を押す、一の鍵を押さえながら蛇腹を引く、というように、演奏者がすべき奏法を表したのが、この奏法譜である。本研究では、奏法譜の中でも、手風琴の鍵の位置と押引きを示した「手風琴譜」<sup>18</sup>を扱う。

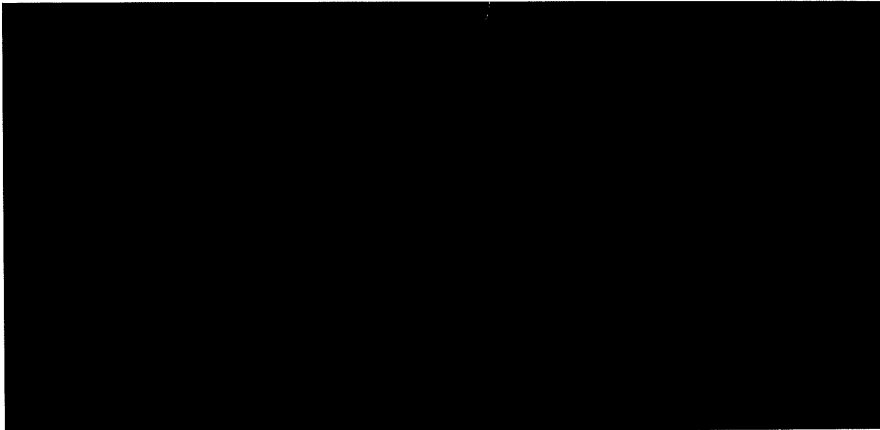
この手風琴譜の特徴としてまず挙げられるのが、その楽器の奏法を示しているのも、音高が直接的に楽譜に記されるわけではなく、間接的に旋律の動きを表しているということである。手風琴の操作が視覚的に書いてあるこの手風琴譜の記譜法を習得すれば、初学者にとっては、演奏する上で非常に分かりやすい記譜法といえる。しかしそれと同時に、2-3-2. で述べたように、手風琴の場合は鍵の番号が音階の順番通りに並んでいるわけではなかったため、初学者にとっては、この手風琴譜に書いてある鍵の番号を奏すること、それにより発せられる音を結び付けるのは難しいと考えられる。

第二の特徴として、この手風琴譜は、曲集によって記号が異なる。例えば、鍵の部分の数字が、漢数字で書かれているものもあるし、算用数字で書かれているものもある。【譜例1】は、2-3-2. と 2-3-3. 及び 2-3-4. で挙げた、新井清次郎、柏原由二の『手風琴独奏自在』の《君が代》の譜例である。2-3-2. 【図2】の手風琴音符を用いている手風琴譜なので、押引きの記号が、押す：○、引く：▲である。数字は漢数字で書かれており、その下に歌詞が書かれている。さらに、拍子や強弱記号も記されている。



【譜例1】 手風琴譜の例 その1 (新井; 柏原 1893 : 1 (曲が掲載されているところからのページ番号) より転載)

【譜例2】は、町田櫻園の『手風琴独案内』の《君が代》の譜例であるが、漢数字という点では【譜例1】と同じだが、押引きの記号は、押す：●、引く：－である。このように、手風琴譜には特に統一された書き方はないのが特徴である<sup>19</sup>。



【譜例2】 手風琴譜の例 その2 (町田 1904 : 11 より転載)

### 3-2. 数字譜

手風琴曲集では、手風琴譜とともに、手風琴の鍵と音の対応表で記されている数字音符を用いた数字譜が掲載されているものもある。そのとき使用されている数字譜とは、「ガラン-パリーシュヴェ方式」を踏襲するものである。「ガラン-パリーシュヴェ方式」とは、「フランスの視唱指導法の体系」(Rainbow 2001 : 440)であり、1742年にルソーが提唱した方法を、19世紀に、ピエール・ガランらが修正したものである(小塩 2003 : 142, 143)。これは、1~7の数字を使って音の高さを直接示す記譜法であり、1オクターブを一つの単位とし、その長調の主音が1と示される。この方法では、通常、3オクターブの音域を表すことができる。低い音域には、数字の下に・を付け、中音域は数字のみ、高音域は、数字の上に・を付ける。また、休符は0として示される(Rainbow 2001 : 440,



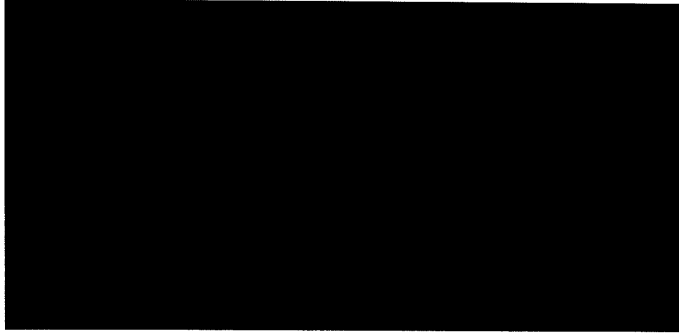
441)。

日本では、明治期の学校教育の「唱歌」の科目で数字譜が用いられた。明治14年刊行の、文部省音楽取調掛が編纂した『小学唱歌集 初編』では、冒頭に数字音符を用いて、音階を視覚的に分かりやすく示して理論を説明している。この曲集の楽譜は全て五線譜だが、その後に刊行された『小學唱歌』では、五線譜と数字譜が併記されたのに加え、数字譜のみのもも用いられた(小塩 2003 : 143-145. )。

この数字譜は、尋常小学校を対象とした第一巻、第二巻で用いられていて、高等小学校を対象とした第三巻～六巻では、曲は全て五線譜のみで書かれている(小塩 2003 : 144)ことから、小塩も述べているように、当時の日本では、「数字譜は初学者のためのものと位置づけられていたのだろう」(小塩 2003 : 145)ということが分かる。つまり、この場合は、五線譜を読めるようになるための導入として、数字譜は用いられていたのである。

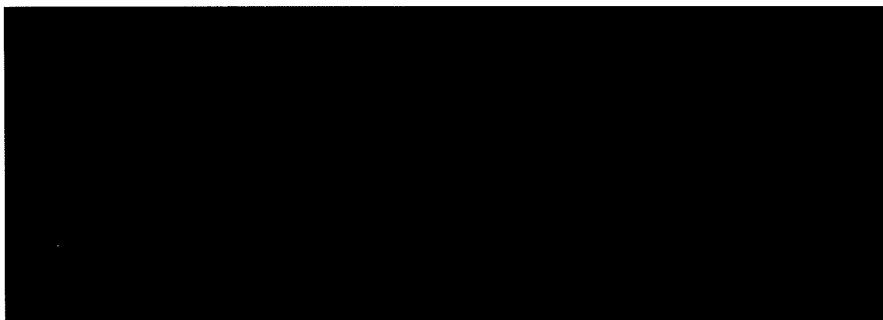
さて、手風琴曲集においても数字譜は用いられていたが、単独で用いられる場合と、手風琴譜や五線譜と併記される場合があった。

【譜例3】は、土岐達の『手風琴指南』より、数字譜が単独で用いられている《君が代》の楽譜である。



【譜例3】数字譜の例 (土岐 1893 : unpaggedより転載)

また、【譜例4】は、三田村楓陰の『手風琴速成独習自在』より、数字譜と手風琴譜が併記されている《君が代》の楽譜である。上に数字譜があり、その下に手風琴譜が記されているのが分かる。この手風琴譜は、押す：●、引く：○で、漢数字で書かれている。



【譜例4】手風琴譜と数字譜併記の例（三田村 1893：1（曲が掲載されているところからのページ番号）より転載）

### 3-3. 手風琴曲集における記譜法の統計

研究対象の一次資料計46冊を基に、明治期に出版された手風琴曲集における記譜法の種類をまとめ、【表1】を作成した。

楽曲において使用されている記譜法の種類	
a 五線譜のみ	2
b 手風琴譜のみ	26
c 数字譜のみ	3
d 手風琴譜と数字譜を併記	8
e 手風琴譜と五線譜を併記	1
f 数字譜と五線譜を併記	2
g 五線譜と数字譜と手風琴譜を併記	4
計	46

【表1】手風琴曲集における記譜法の種類の統計（渡邊作成）

※同一の著者による通巻の曲集の場合にも、一冊ずつ統計した

※重版されている曲集についても、現物を確認できるものに対しては、一冊ずつ統計した

### 3-4. 楽曲の記譜法からの考察

【表1】から分かるように、手風琴譜のみ用いている場合が計26冊と、圧倒的に多かった。このことは、2-2. 及び3-1. で述べたように、「初学者」が「独習」できるよう、手風琴の押さえる鍵と蛇腹の押しきを視覚的に簡潔に示した手風琴譜が多く採用されたためと考えられる。

また、次に多いのが、手風琴譜と数字譜を併記した記譜法である。これは、3-1. で述べたように、初学者にとって、手風琴譜をみただけでは、何の音が鳴るのか分からないという問題点を改善したものであると推測できる。これについては、手風琴の独習を主たる目的としながらも、同じく当時流行していた銀笛等の楽器と併用して使用することを目的としているものもあったので<sup>20</sup>、「曲譜の中で日本数字きよくふ なかにほんすろじに○や●のあるのは、手風琴てろきん

ひとりけいこ 〇〇やう  
 独稽古に必要なところで、其上の算用数字は、風琴、ヴッキオリン、陽琴等にて奏するに  
 べんり ため  
 便利な爲であります」(葎田 1908 : 1) というように、手風琴曲集で手風琴と併用して対  
 象にしている他の楽器を演奏するときに便利という面もあったようである<sup>21</sup>。しかし、手風  
 琴譜ではなく、数字譜で用いる数字音符を指して、「～楽譜ハ初學者に早く悟り得べき數  
 じおんぶ  
 字音符なり」(永井；小島 1892a : 3) と述べられているように、当時「唱歌」で用いら  
 れていた数字譜と、初学者には理解しやすい手風琴譜を併記することで、演奏者の音に対  
 する理解を促したかったという意図も著者にはあったと考えられる。

そして、全く手風琴譜を用いていない曲集は【表1】のa、c、fの7冊しかないので、手  
 風琴譜は、今回調査した46冊中、実に39冊において用いられていることが分かった。

しかし、手風琴譜に、数字譜、または五線譜が併記されている場合は、音が理解でき  
 るが、手風琴譜のみの26冊の場合には、初学者が自分の鳴らしている音をどのように理解し  
 ていたのかについては疑問が残る。そこで、音を理解する際に補助的な役割を担ったと考  
 えられるのが、2-3-2. で触れた、手風琴の鍵と音の対応表である。

### 3-5. 手風琴の鍵と音の対応表における数字音符の有無

2-3-2. で述べた手風琴の鍵と音の対応表に、数字譜で用いられる数字音符が記載さ  
 れているかどうかに着目し、研究対象の46冊の曲集に掲載されている、手風琴の鍵と音の  
 対応表における数字音符の有無を調査した。

その結果、通巻で第一集のみに楽典の解説が掲載されている2冊を除く44冊のうち、43  
 冊の対応表に、数字音符が掲載されていた。これにより、楽曲の楽譜は手風琴譜のみの場  
 合にも、対応表においては数字音符が記載されていることになり、ほぼすべての曲集にお  
 いて数字譜で用いられる数字音符が記載されていることになる。

これは、小塩も述べていたように、当時の日本では、「数字譜は初学者のためのもの  
 と位置づけられていたのだろう」(小塩 2003 : 145) ということに起因すると考えられ  
 る。「唱歌」においては、五線譜を読めるようになるための導入として数字譜は用いられ  
 たが、この手風琴曲集に関していえば、手風琴と西洋音楽の知識の「初学者」にとって、  
 数字音符は理解しやすいものだと考えられ、その手風琴譜を読む、いわば補助的な役割と  
 して、対応表に記載されたと考えられる。

## 4. 結論

今回は、手風琴曲集の記譜法、及びその記譜法を理解するために掲載された手風琴の鍵  
 と音の対応表における数字音符の検討から、その曲集を手にした人々が、西洋の楽器であ  
 る手風琴を演奏する際に、手風琴譜を主とした楽譜で演奏し、そして、その理解のため  
 に、手風琴譜とともに併記されている数字譜、そして、数字譜が併記されていない場合

は、手風琴の鍵と音の対応表に用いられている数字音符が重要であったことを明らかにした。それは、手風琴曲集は、手風琴や西洋音楽の知識に初めて触れる「初学者」が独習することを目的としていたため、そのような人々を想定して、これらの曲集を手にした人々が分かりやすい方法を考慮した結果であると考えられる。楽譜においては「手風琴譜」を中心とした、「演奏し易さ」を求めた楽譜、その楽譜の理解においては、五線譜よりも、「初学者」に分かりやすい「数字譜」を併記したり、手風琴の鍵と音の対応表で「数字音符」を記載したりすることによって、西洋音楽の音の「理解し易さ」を追求した。

今後は、この曲集について、さらに、楽典の解説の項目も考慮することで、この手風琴曲集が、当時の人々に対して、どの程度の西洋音楽の知識を提供したのか、ということを見ていきたい。また、今回は手風琴曲集の著者についてはほとんど触れられなかったもので、彼らの経歴等も考慮することで、当時の手風琴曲集の著者が、西洋音楽を初めて学ぶ人々に提供した知識の根拠を明らかにしていきたいと考えている。

#### 注

1. 上野（2012：25）では、「手風琴のボタン番号とタブ譜の記号の対照表」とあるが、本研究では「手風琴の鍵と音の対応表」に統一する。
2. 高田（1993：72, 73）の表4「明治期に関西で出版または販売された手風琴教則本」で挙げられている手風琴曲集のうち、国立国会図書館、大阪音楽大学音楽博物館の双方でも確認できない資料が11冊あった。これらについては現在調査中だが、本研究では対象外とし、現物を確認できたもののみを対象とした。  
また、本研究で用いる手風琴曲集名は、旧字か否かも含め、これらの資料を所蔵している国立国会図書館、大阪音楽大学音楽博物館での名称で統一した。よって、高田（1993）、上野（2012）と、同一の曲集を挙げていても曲集名が異なることがある。
3. 奥付には「撰者 吉榮菊次郎」とあるが、おそらく菊吉秋調の本名と思われる。詳しくは高田（1993：61, 62, 70）を参照のこと。
4. 明治26年11月に出版された『手風琴速成独習自在』の初版の楽典解説には「三田村楓陰著」とあるが、奥付には「編者兼発行者 和田安治郎」とあり、三田村の名は見当たらない。さらに第4版では、和田安次郎（「治」が「次」となっている）が著者となっており、三田村の名は一切載っていない。なぜ初版と第4版で著者が異なるのか、現在調査中であるが、今回は同一の曲集が重版された例として挙げた。
5. 『手風琴独まなび：下の巻』に関しては、現物が確認できたのは、いずれも国立国会図書館のデジタル化資料である明治31年10月出版の訂正増補第3版、明治43年9月の訂正第12版のみであったが、訂正増補第3版の奥付に「明治三十年三月廿二日初版印刷 明治三十年十月十五日再版發行」とあったため、本文でも重版の例として記した。同様に、山田武城の

『手風琴独習 全』、塚本卯八郎の『手風琴の楽』も、初版の現物は確認できなかったが、それぞれ重版の際に記されている初版や再版の年月を記した。

6. 中野史郎の『新刊 手風琴俗曲獨案内—銀笛吹奏法付き』、市川道子の『手風琴独習 新曲三千題』に関しては、初版のものは確認できず、重版の際にも初版の年月が書いていないのだが、高田 (1993 : 72, 73) では、2冊とも、明治30年8月に出版されたとあるので、本文ではそれを記した。
7. 前掲注6を参照のこと。
8. 前掲注5を参照のこと。
9. 町田櫻園の『手風琴独案内』 (東雲堂發行) は、明治29年10月の初版、明治36年9月のものとも、現物を確認できた。しかし重版の際、奥付には手書きで「再版」と書かれているように見えるが、国立国会図書館のデータでは、「訂正4版」と書かれている。今回は、国立国会図書館のデータを優先した。
10. 町田櫻園の『手風琴独案内』 (林盛林堂發行) は、発行者の山田の名が、初版では「山田健三郎」、再版では「山田縫三郎」となっていた。
11. 前掲注5を参照のこと。
12. 以下、引用は、振り仮名、送り仮名、旧字に関しても原文通り記述することとする。ただし、変体仮名は現代仮名遣いにした。また、判読不可能な文字は、□で表す。
13. 他にも、永井 ; 小島 (1891, 1892a, 1892b, 1893, 1894) 、三谷 (1893) 、中野 (1900) 、山田 (1903) 、塚本 (1907) 、野田 (1910) 等に、手風琴が独習に適していることや、初学者を対象としている旨が書かれている。永井 ; 小島 (1891, 1892a, 1893) に関しては、上野 (2012 : 24, 25) を参照のこと。
14. 手風琴の左側にある2つの和音の鍵については、手風琴の扱い方を説明する際に言及している曲集は多くあったが、それが実際にどのような音を発するのかを説明したり、楽譜に記載している曲集は少ない。その中で、菊吉 (1890) では、2つの鍵とも、押すと「c-e」、引くと「G-d」を発すると五線譜で示されている。また、第十二、十三曲には、へ音記号で、この左側の2つの鍵を用いた伴奏が併記されている。さらに、三谷 (1891) では、一の鍵 (乙の鍵を指す) を押すと「C-c」のオクターブ、引くと「F-g」 (「G-g」の誤りである) 、また、二の鍵 (甲の鍵を指す) を押すと「c<sup>1</sup>-e<sup>1</sup>-g<sup>1</sup>」、引くと「d<sup>1</sup>-f<sup>1</sup>-a<sup>1</sup>」が出るとされている。「d<sup>1</sup>-f<sup>1</sup>-a<sup>1</sup>」に関しては、高田 (1993 : 56) でも指摘しているように、「ソシレ」 (音高は不明) の間違いである。また三谷 (1893) では、三谷 (1891) での説明から修正し、一の鍵を押すと「C-c」のオクターブ、引くと「G-g」のオクターブ、また、二の鍵を押すと「g-c<sup>1</sup>-e<sup>1</sup>」、引くと「h-d<sup>1</sup>-f<sup>1</sup>」が出るとされている。そして第十五曲、第十七曲から第二十曲の5曲に、「B」という印の伴奏の手風琴譜も併記されている。さらに、四竜 (1892 : 30-50. ) 、山田 (1903 : 7-10. ) 、桃井 (1899 : 69-73. ) (曲が掲載されている

ところからのページ番号) ) では、手風琴楽隊として、手風琴と太鼓等の合奏譜が掲載されているが、そこで《君が代》のベースのパートとして、左の鍵の手風琴譜が併記されている。いずれにしても、「又左手の甲乙なる二個の鍵を押引すれば低音(ベース)を發す然れ共右手を充分練習せる上使用すべし」(新井 1910 : 2)、2-3-1. の引用においても「之ハ充分練習ノ上ナラザレバ成得難カルベシ」(塚本 1907 : 2)と書かれていること、そして手風琴曲集の楽譜には、ほとんど右手の鍵の楽譜しかないことから、本研究では対象外とした。

15. 本研究では、文字で音高を表す際、中央のc(ドイツ音名)をc<sup>1</sup>と表す表記法に従う。
16. これらの曲集には、工尺譜を見て月琴も演奏できると記載されている(葎田 1908 : 34)ものもある。
17. 詳しくは高田(1993 : 71)を参照のこと。
18. 高田(1993)では、手風琴の奏法譜のことを「手風琴譜」と称しているため、本研究でもそれに則る。
19. しかし、その中では、【譜例4】で挙げた『手風琴速成独習自在』の、押す：●、引く：○で、鍵番号は漢数字で記されている手風琴譜は他に11冊あった。この曲集の第4版である和田(1895)をはじめ、箸尾(1893, 1894, 1895)、吉岡(1898)、真岡(1898)、葎田(1905, 1908)、中野(1900)、市川(1901)、野田(1910)である。(真岡(1898)には奥付が無かったため、出版年は国立国会図書館の情報を記載した。出版地は不明である。)
20. 手風琴曲集は、手風琴の演奏を主な目的としながらも、中野史郎の『新刊 手風琴俗曲獨案内—銀笛吹奏法付き』のように、当時同じく流行していた銀笛等の楽器と併用して使用することを目的としたものもあった。例えば、永井；小島(1891, 1892a, 1893)では、ヴァイオリンや洋琴(ピアノ)、風琴(オルガン)も対象とされ、さらに永井；小島(1894)では、手風琴の他に、三絃(三味線)、胡弓、八雲琴、箏、ヴァイオリン、月琴、清笛、尺八、篠笛の使用法の解説も掲載されている。箸尾(1895)では、手風琴の鍵と音の対応表に、吸風琴の対応表も併記されている(箸尾 1895 : 8)。
21. 葎田(1908 : 1)の引用にある「陽琴」とは、19世紀にアメリカで流行したオートハープを模したものであると考えられる(塩津 1995 : 26)。

#### 主要参考文献(ヘボン式に準ずる)

DART, Thurston; MOREHEN, John; RASTALL, Richard

2001 “Tablature”, SADIE, Stanley; TYRRELL, John(ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2<sup>nd</sup> ed.), London: Macmillan: 24: 905-914.

金子, 敦子

- 2006 『近代日本における洋楽器開発史の研究』平成18年度 大阪芸術大学 博士論文。  
中村, 洪介
- 2003 『近代日本洋楽史序説』東京：東京書籍。  
小塩, さとみ
- 2003 「数字譜の歴史」『大正琴図鑑』金子, 敦子 (監修) 東京：全音楽譜出版社：140-150。  
RAINBOW, Bernarr
- 2001 “Galín-Paris-Chevé method”, SADIE, Stanley; TYRRELL, John(ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2<sup>nd</sup> ed.), London: Macmillan: 9: 440-441。  
澤田, 直子
- 1992 「明治中期の音楽教育—「音楽雑誌」を中心に そのⅠ—」  
『拓殖大学論集』第196巻：67-94。  
塩津, 洋子
- 1995 「明治期の洋楽器製作」『音楽研究 (大阪音楽大学音楽研究所年報)』第13巻：5-36。  
高田, 知子
- 1993 「明治期の関西における手風琴の流行」『音楽研究 (大阪音楽大学音楽研究所年報)』  
第11巻：53-78。  
塚原, 康子
- 1991 「19世紀の日本における西洋音楽の受容—近代日本における新しい音楽活動の形成  
過程—」  
『音楽学』第37巻2号：117-131。  
1993 『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』東京：多賀出版。
- 上野, 正章
- 2012 「明治中期から大正期における洋楽器で日本伝統音楽を演奏する試みについて—楽  
譜による普及を考える—」『日本伝統音楽研究』第9号：21-42。

#### 一次資料(ヘボン式に準ずる)

(出版に関しては、資料の奥付と表紙から判明できる範囲で記載)

(本論並びに注で引用した資料のみを記載した)

#### 1. 国立国会図書館所蔵資料(デジタル化資料)

新井, 清次郎 (撰曲) ; 柏原, 由二 (調曲)

1893 『手風琴独奏自在』大阪：藜光堂 (出版), 此村, 彦助 (発行者)。

新井, 省五郎 (著)

1898 『手風琴独まなび. 下の巻-訂補3版.』(訂正増補第3版) 東京：十字屋 (發行所),  
鈴木, 楨 (發行者)。

- 1910 『手風琴獨まなび：軍歌唱歌端歌流行歌地唄長唄大全. 下の巻--第12版. 』（訂正第12版）東京：十字屋（發行所），鈴木，楨（發行者）。

葭田, 東海（著）

- 1905 『手風琴獨稽古. 第1集』大阪：名倉昭文館（發行元・發賣者），名倉，龜楠（發行者）。
- 1908 『手風琴獨稽古. 第2集』大阪：名倉昭文館（發行元・發賣所），名倉，龜楠（發行者）。

箸尾, 竹軒（著）

- 1893 『手風琴獨案内. [第1集]』大阪：青木嵩山堂（發賣所），青木，恒三郎（發行者）。
- 1894 『手風琴獨案内. 第2集』大阪，東京：青木嵩山堂（發賣所），箸尾，虎之助（發行者）。
- 1895 『手風琴獨案内征清歌曲集』大阪：青木嵩山堂（製本發賣所），青木，恒三郎（發行者）。

池田, 武次郎（著）；加川, 主悦（閱）（加川の名は表紙のみ）

- 1893 『西洋楽譜流行端歌俗曲集：一名・風琴獨習之友』兵庫：熊谷久榮堂（發賣元），熊谷，幸介（發行者）。

伊沢, 修二（編）

- 1892 『小学唱歌. 1』東京：大日本圖書株式會社。

町田, 櫻園（著）

- 1896 『手風琴獨案内』（初版）東京：東雲堂（發行所），西村，寅次郎（發行者）。
- 1903 『手風琴獨案内--訂正4版. 』（第4版）東京：東雲堂（發行所），西村，寅次郎（發行者）。
- 1904 『手風琴獨案内』（初版）東京：林盛林堂（發行所），山田，健三郎（發行所），林，甲子太郎（發行者）。
- 1905 『手風琴獨案内：凱旋祝捷送迎弔祭用軍歌唱歌俗曲--訂正再版. 』（第2版）東京：林盛林堂（發行所），山田，縫三郎（發行所），林，甲子太郎（發行者）。

真岡, 吉清（著）

- 1898 『西洋横笛手風琴獨稽古』出版地不明：小山，藤吉（發行者）。

三田村, 楓陰（著）

- 1893 『手風琴速成獨習自在』大阪：和田，安治郎（編者兼發行者）。

三谷, 種吉（著）

- 1893 『手風琴奏法指南並ニ和洋流行楽譜集』大阪：石原樂器舖（賣捌所），上田，貞治郎（發行者）。



桃井, 静軒 (編)

- 1899 『手風琴独奏: 正則. 第1集』大阪: 中川玉成堂 (發賣者), 田中宋榮堂 (發賣者), 又間, 安次郎 (發行者), 又間精華堂 (藏).

文部省音楽取調掛 (編)

- 1881 『小学唱歌集. 初編』.

永井, 岩井 (著); 小島, 賢八郎 (著)

- 1891 『日本俗曲集: 西洋楽譜』 (初版) 大阪: 三木書店 (發賣), 三木, 佐助 (發行者).

- 1892a 『日本俗曲集: 西洋楽譜. 第1集-訂2版. 』 (訂正第2版) 大阪: 三木書店 (發兌), 三木, 佐助 (發行者).

- 1892b 『日本歌曲集: 西洋楽譜一名・日本俗曲集続編』 (初版) 大阪: 三木書店 (發兌元), 三木, 佐助 (發行者).

- 1893 『日本俗曲集: 西洋楽譜-訂4版. 』 (第4版) 大阪: 三木書店 (發賣元), 三木, 佐助 (發行者).

- 1894 『西洋楽譜日本歌曲集: 一名日本俗曲集續編-訂正大増補第2版. 』 (第2版) 大阪: 三木書店 (發賣元), 三木, 佐助 (發行者).

野田, 山人 (著)

- 1910 『手風琴独習』大阪: 立川文明堂 (發賣元), 岡本増進堂 (發賣元), 立川, 熊次郎 (發行者).

四竈, 訥治 (著)

- 1891 『手風琴独習之友. 第2集』東京: 共益商社書店 (發賣元), 四竈, 訥治 (著作者兼發行者).

- 1892 『手風琴独習之友. 第3集』東京: 共益商社書店 (發賣元), 四竈, 訥治 (著作者兼發行者).

土岐, 達 (著)

- 1893 『手風琴指南』大阪: 吉岡書店 (發賣所), 吉岡支店 (發賣所), 吉岡, 平助 (發行者).

塚本, 卯八郎 (海の家小舟) (編)

- 1907 『手風琴の楽-増補改訂3版. 』 (第3版増補改訂) 東京: 塚本支店出版部 (發行所), 塚本, 力壽 (發行者).

吉岡, 勇次郎 (著)

- 1898 『手風琴雑曲集: 独習自在』京都: 山中書店 (發行所), 大阪: 岡本書店 (發行所), 山中, 勘次郎 (發行者), 岡本, 宇野 (發行者).

2. 大阪音楽大学音楽博物館所蔵資料

市川, 道子 (著)

- 1901 『手風琴独習 新曲三千題』 (第12版) 大阪: 柏原圭文堂 (發兌元), 柏原, 政次郎 (發行者) .

菊吉, 秋調 (吉榮, 菊次郎) (撰)

- 1890 『風琴手引草』 大阪: 島田書房 (梓), 島田, 伊兵衛 (發行者) .

三谷, 種吉 (著)

- 1891 『手風琴曲譜集第一集』 京都: 村上書廬 (發兌), 村上, 勘兵衛 (發行者) .

中野, 史郎 (著)

- 1900 『新刊 手風琴俗曲獨案内一銀笛吹奏法附き』 (第6版) 大阪: 矢島誠進堂書店 (發賣元), 矢島, 嘉平次 (發行者) .

四竈, 訥治 (著)

- 1890 『手風琴独習之友第一集』 東京: 共益商社書店 (發賣元), 四竈, 訥治 (著作者兼發行者) .

和田, 安次郎 (編)

- 1895 『手風琴速成独習自在』 (第4版) 大阪: 矢島誠進堂 (發兌元), 和田, 安次郎 (編者兼發行者) .

山田, 武城 (著)

- 1903 『手風琴独習 全』 (第5版) 東京: 修學堂 (發賣所), 辻本, 末吉 (發行者) .

わたなべ さえこ

お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了。現在、博士後期課程在学中 (比較社会文化学専攻)。